

教団新報

定 価 1部 144円(本体 133円+共 206円)
予約購読料 1年分 千共 5,150円
紙代のみ 3,600円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18
一時移転先 169-0072 東京都新宿区大久保 1-7-18
電話 03(3202)0546,FAX03(3207)3918
URL http://uccj.org
発行人 長 崎 哲 夫
編集主筆 渡 邊 義 彦
印刷所 株式会社きかんし



全国から御殿場に若者たち 367 名集う

教会中高生・青年大会2014

イエス・キリストの名によって立ち上がり歩きなさい

教団主催による半世紀ぶりの開催

8月19日～21日の日程で、YMCAの施設である御殿場の国際青少年研修センター東山荘を会場にして「教会中高生・青年大会2014」が開催された。大会の主催は日本基督教団であり、特に、伝道委員会ならびに伝道推進室と、教育委員会の委員を中心として実行委員会が組織され、約2年前より準備が進められた大会である。教団は、2000年に開催された第32回教団総会において「日本基督教団は21世紀に向けて青年伝道の使命に力を注ぐ件」を可決したが、その実質化としての大会でもある。

大会を終え、さらなる伝道の前進のため

大会が終わり、書類整理をしていると東山荘で会った若者たちの姿が目につく。私はいくつかの部屋をめぐっていたが、参加者の姿を垣間見ることができた。不安な様子で受付に並ぶ中学生の男子、はしゃぎながら駆け回って行く女子高校生たち、心の奥底に悩みを秘めた表情で説教のメモを取る青年。私が以前仕えた教会では可愛い子どもだったのに私に挨拶に来て一緒にスマホで写真を撮った青年がいた。こんなこともあった。一日のプログラムが終わり、夜の見回りをしていると3人の男子青年が向こうから歩いて来て声をかけてきた。「時間が過ぎていることは分かっているんですけど、

僕たち、もっと話をしたいんです。どこか、話のできる場所はありませんか。そう、先生も一緒に話しましょう。本来は就寝時間なのだが、切羽詰まった様子なので談話コーナーで話を聞くことにした。しばらくすると仲間の牧師がジュースの差し入れを持って輪に入ってきた。恋の相談かと思っていたら、それぞれ自分たちが属する教会の将来について考えていることを熱く語り出した。気分としては疲れていたが早く切り上げたかったが、思い直して彼らが満足するまで付き合おうと覚悟し午前2時過ぎまで話し合った。最後は彼らのためにその教会のために祈って別れた。こういう青年がいることに感謝し頼もし

ふとかつての自分を思い出す。中高生の頃にキャンプや修養会に参加して多くの仲間たちと出会うことができた。やがて私は牧師になり、教区や分区分支で青年の担当をした。聖隷事業団、アジア学院を会場にしたワークキャンプで過ごした夏の日々が懐かしい。あの時の若者たちは今頃何をしているのだろうか。

過日、伝道委員会主催の教区伝道委員長会議で大会のアピールをする機会が与えられた。出席者から「教団で大会を行うことに何の意味があるのか」という問いが出た。毎年各教区で内容豊かなキャンプが開催されて運動するようになり、若



大会中のすべての礼拝（開会、早天、派遣）においてこの使徒言行録3章6節の御言葉が解き明かされた。集められた参加者の総数は、ユースミッション関係のアメリカ、ドイツ、台湾、そして韓国からの参加者も含め、北は北海道、南は沖縄の全教区153教会から367名。内訳は、中学生45名、高校生49名、青年154名、引率30名、スタッフ79名であった。

それぞれ年代別に立てられた講師は3名。青年の講演を東京神学大学・芳賀力学長が、高校生の講演を金

城学院大学・深井智朗教授が、中学生の講演を青山学院大学・塩谷直也准教授がそれぞれ担当した。開会礼拝の説教は大会実行委員長増田将平牧師（青山）。自らが「イエス・キリストの名によって立ち上がり歩きなさい」者である」とし、「大会においてこのことを皆で体験しよう」と語った。プログラムは中学生、高校生、青年と別れて行われるため、参加者が一堂に会する機会はないが、礼拝は、とにかく数の多

さには圧倒されたという声があった。大会のプログラムの中心は、それぞれ2回の講演と3～4回行われる分団である。講演で聞いた事柄、感じた事柄を少人数の分団で共有し、深めていく。信仰の語り合いを通して、慣れない者同士の距離が縮まっていく。2日目には選択制のプログラムの時間が用意された。野外スポーツ、館内レク、オリエンテーリング、寒沢（さざわ）散策、クラフト、映画鑑賞、講師・平安によって「すべての



まるでコンサート会場のように

参加者よ、日本基督教団よ、日本よ、イエス・キリストの名によって立ち上がり歩きなさいと説教がされた。大会前から、そして大会中も、日本基督教団がこの

ような大会を開催するのは、およそ半世紀ぶりのことであると強調された。次の開催が半世紀後となることはなさそうである。（小林信人報）

仕える教会では、9月に高齢者に配慮する礼拝を献げる。1時間を超える礼拝には出席が難しいという方や、長く礼拝に与っていない高齢の方々を、いろいろな手立を尽くして主日礼拝にお連れする。礼拝は聖餐を含めて1時間以内に終るよう工夫する。会衆の讃美と共同の祈り、そしてひとつ食卓を囲む幸いに与る喜びの声を聞くことができる。

▼一方、仕える教会では幼稚園を営んでいることもあるが、子供たちの礼拝出席が比較的多い。幼子、子供たちへの伝道も教会学校の教師たちを中心に懸命だ。目下、教会学校から受洗者が誕生することが大きな祈りである。▼そして、青年たちはと言つと、1年毎に平均年齢が上がりつつある。教会学校で一緒に礼拝を献げてきた子供たちが教会へと繋がるよう、また彼ら、彼女らが教会へと戻ってくることを祈り続けている。▼そのような青年会の中から、今年の「中高生・青年大会」に参加した青年たちは、若者たちの大きな集いに身を置き励ましを受けて教会に帰ってきた。▼教会には幼子も子供も、青年たちも、壮年も年を重ねた者たちも必要とされている。赤子から高齢の者たちまで、あらゆる年齢層が招かれ集う教会を、と願っている。いろいろな取り組みと工夫があるはずだ。限られた力と賜物を良く用いるため祈りたい。

荒野 仕える教会では、9月に高齢者に配慮する礼拝を献げる。1時間を超える礼拝には出席が難しいという方や、長く礼拝に与っていない高齢の方々を、いろいろな手立を尽くして主日礼拝にお連れする。礼拝は聖餐を含めて1時間以内に終るよう工夫する。会衆の讃美と共同の祈り、そしてひとつ食卓を囲む幸いに与る喜びの声を聞くことができる。



若い、大きな会衆による讃美

教会中高校生・青年大会において、中学生、高校生、青年と3名の講師が立てられ、1日目、2日目とそれぞれ2回の講演があった。

中学生講演では、塩谷直也氏(青山学院大学准教授)が講師として立てられた。講演冒頭、ゲームをしなから、目を開けること、心を開けることの大切さに触れ、共に3日間を過ごす仲間を見出すよう促した。また、おでん屋を舞台にした人形劇によって、大きな荷物を背負った旅人とサラリーマンのやりとりを演じつつ、信仰とは重荷がなくなることではなく、重荷を共に背負ってくださる方を知ること、だと語った。

2日目は、講師自ら描いた絵本が用いられた。「自分という楽器の演奏を誰にしようのか」という問いかけがあり、洗礼を受け信仰者として歩むことは、親でも、先生でも、恋人でも、自分自身でもなく、楽器の演奏者としてイエス様を迎えることであるとのメッセージを語った。

ゲーム、人形劇、絵本と趣向を凝らして、キリストと共に歩む人生へと招く講演であった。

高校生講演では、深井智朗氏(金城学院大学教授)が立てられた。

講演Ⅰでは「自由と奉仕」と題し、「自由とは何か」について、「〜からの自由

「〜への自由」という2つの自由を語った。私たち人間は自由になったあとで、自由の使い方を間違えると、再び奴隷状態に戻ってしまうことに触れ、解放としての自由ではなく、与えられた自由をどのように使うのか」が大切であること、聖書の十戒より「自由の訓練」が必要であることを語った。ガラテヤの信徒への手紙5章1節、13、15節により、まことの自由を得させてくださったキリストの出会い、その自由を使う道を示した。

講演Ⅱでは「後世への最大遺物」(内村鑑三「後世への最大遺物」(岩波文庫)より)と題し、「与えられた人生をどのように用いるのか」との問いと共に、賜物、カリスマについての話があった。

「自分を知る」とは、「私を私以上に知っている神」、「神に知られている自分を知る」ことであり、キリストによる神の自己犠牲により、生かされている自らを知ることであると語った。

更には、キリストによって与えられた人生であることを知らされた以上、それに応える生き方へと呼ばれていると結んだ。

青年講演では芳賀力氏(東京神学大学学長)が立

講演

中学生 青山学院大学准教授 塩谷直也
高校生 金城学院大学教授 深井智朗
青年 東京神学大学学長 芳賀 力

教会中高校生・青年大会2014

てられた。

講演Ⅰでは、アブラハム、ヤコブの生涯から、信仰者の歩みが巡礼の旅であることを示しつつ、信仰生活の旅の中で、主と出会い、「自ら、大きな文脈の中に置かれてい

第14回台湾基督長老教会と日本基督教団との教会協議会(PCT)と日本基督教団(UCCJ)との教会協議会が、8月25日から28日の期間、北海道クリスチャンセンターを会場にして開催された。主題は「荒れ野に道を、砂漠に河を」(イザヤ43・19)、参加者は台湾基督長老教会から18名、教団からは4役を含め28名であった。

開会礼拝は18時から行われ、李孟哲台湾協約委員長が司式、羅仁貴台湾基督長老教会総会議長が説教を担当した。

2日目は「教会協議会」のタイトルに相応しく、充実した協議が行われた。午前中はPCTと教団から派遣されている宣教師の宣教師報告を聞き、質疑応答の時を持った。ディバン・スクールマン宣教師は台湾の原住民(ブナン族)出身で、2005年に来日。北海道区内の諸教会の礼拝奉仕に加え、特に宣教の中心課題であるアイヌ民族との関わりについて話された。続い

て教団から派遣され、高雄で30年にわたり教会に仕えてきた林田義行宣教師の報告を聞いた。

北海道大学キャンパス内での昼食と散策の後、午後には青年への宣教についての話題があり、PCTからは台北大学生センターチャプレンの周宇緯牧師が、教団からは西東京教区から参加の佐藤飛文氏と台湾協約委員の野田沢牧師がそれぞれ発言を行った。

17時からPCTの林芳仲総幹事と長崎哲夫総幹事の共同司会により、それまでの諸報告と諸課題を総括し、翌日作成予定の共同声明のために、活発な意見交換と質疑応答がなされた。前夜に引き続き北海教区の婦人会が中心となった手作りの夕食が振舞われ、夜は交流会が持たれた。

3日目は一同バスで旭川に行き、川村力子トアイヌ記念館を訪問後、旭山動物園、三浦綾子記念文学館を訪れた。特に三浦綾子記念文学館では三浦光世館長から直接、短時間ではあっても話を聞く機会を得たことは幸いであった。

最終日は秋山徹世界宣教委員長が司会となり、双方

充実した協議を共同声明とする

◆第14回台湾基督長老教会と日本基督教団との教会協議会

第 14 回台湾基督長老教会と日本基督教団との教会協議会

共 同 声 明

台湾基督長老教会と日本基督教団は2014年8月25日から28日まで、北海道クリスチャンセンターにおいて第14回教会協議会を開催した。今回の協議会は「荒れ野に道を、砂漠に河を―主の希望に生きる共同体として」(イザヤ43・19)の主題により、両教会が希求している宣教の課題、特に青年への伝道、3・11以降の災害支援活動協力、宣教師の派遣と支援、正義と平和、人権の課題を共有した。

両教会はこの協議会で検討された課題を分かち合い、聖霊の導きの下、具体的な達成を目指すため、以下の共同声明を発表する。

1. 両教会は、いかなる世界情勢の変化の中にあっても、主イエスこそが希望であり、荒れ野に道を拓くお方であることを確認した。
2. この協議会で、ディヴァン・スクールマン宣教師より、アイヌ民族とキリスト教会との懸け橋となるために働かれた9年間の歩みを聞いた。同宣教師と北海教区の連携の働きに対して、両教会はさらに理解を深め、この働きが前進するために祈り、支援を続ける。また、台湾の高雄の日本語基督長老教会で宣教師として働いている林田義行牧師の30年にわたる宣教の働きを聞いた。PCTとUCCJとの緊密な関係の中でこれらの宣教が行われるべきことを確認した。
3. PCTの青年宣教の多方面にわたる活動、UCCJの東日本大震災により被災した地域での数多くのボランティア活動や教団SCFとの青年交流の報告を聞いた。それらの働きのなかでPCTの青年とUCCJの青年の「ユースミッション」をはじめとする豊かな交流の経験が有益であることを認め、両教会はさらにこの青年の派遣を含め、交流を活性化することに努める。
4. UCCJは、PCTの「教会は国の希望のしるし」というテーマのもとで、信仰と愛を通して国家の希望となるようにとの祈りと願いを実現するために、正義と平和、人権問題に取り組む活動を支持する。両教会は武力を持って世界平和を脅かすいかなる行為に対しても反対し、主イエスによる世界平和の推進のために祈り、協力する。
5. UCCJは東日本大震災に際してPCTをはじめ多くの世界の教会からの人的、財的支援に感謝する。PCTはUCCJの東日本大震災による被災教会や被災地での人道支援活動に対して、深い関心と祈り、今後も支援を継続する。
6. 両教会は原子力発電所の開発、維持、放射能廃棄物の処理について、それらがもたらす深刻な環境破壊に対して深い懸念と反対の立場を共有し、このために正確な情報と理解が教会と社会に広がるように努め、また、国際的なネットワークの構築を目指す。
7. この協議会では教会会議における女性の参加と女性教職の置かれている状況について両教会から語られ、女性差別やジェンダー・ジャスティスについて取り組むべきであることを確認した。
8. 日本にある5つの台湾教会がUCCJに参加している恵みを感謝し、その困難な宣教の状況について理解し、UCCJの責任において課題として残されている負担金問題について前向きに検討する。台湾にある日本語教会の同種の問題についてもPCTは検討する。

第 14 回台湾基督長老教会と日本基督教団との教会協議会
2014 年 8 月 28 日



主の希望に生きる共同体、共に

の参加者の積極的な発言を通して共同声明が作成された。

閉会礼拝の説教は雲然俊美書記が担当した。(加藤 誠報)

PCT・UCCJ 青年交流プログラム

世界教会的な仲間となれた

8月5日から17日、台湾基督長老教会 (Presbyterian Church in Taiwan / PCT) と日本基督教団教育委員会の青年交流プログラム、ユースミッションに参加してきた。これは、基本的に2年に一度、開催地を両国交互にして開くが今回は台湾で行われた。このプログラムを通して、多くを学び、青年たちと世界教会的な仲間となれた。感謝してここに報告させていたきたい。

今回のツアーは、主に台北、宜蘭、台東の3地域(長光、紅葉、新香蘭、そして台南というように、台湾を北から南まで、東海岸沿いに縦断した。参加者は台湾から5名、日本からは3名であった。その中には、

今回のツアーは、主に台北、宜蘭、台東の3地域(長光、紅葉、新香蘭、そして台南というように、台湾を北から南まで、東海岸沿いに縦断した。参加者は台湾から5名、日本からは3名であった。その中には、

今回のツアーは、主に台北、宜蘭、台東の3地域(長光、紅葉、新香蘭、そして台南というように、台湾を北から南まで、東海岸沿いに縦断した。参加者は台湾から5名、日本からは3名であった。その中には、

今回のツアーは、主に台北、宜蘭、台東の3地域(長光、紅葉、新香蘭、そして台南というように、台湾を北から南まで、東海岸沿いに縦断した。参加者は台湾から5名、日本からは3名であった。その中には、

今回のツアーは、主に台北、宜蘭、台東の3地域(長光、紅葉、新香蘭、そして台南というように、台湾を北から南まで、東海岸沿いに縦断した。参加者は台湾から5名、日本からは3名であった。その中には、

今回のツアーは、主に台北、宜蘭、台東の3地域(長光、紅葉、新香蘭、そして台南というように、台湾を北から南まで、東海岸沿いに縦断した。参加者は台湾から5名、日本からは3名であった。その中には、

今回のツアーは、主に台北、宜蘭、台東の3地域(長光、紅葉、新香蘭、そして台南というように、台湾を北から南まで、東海岸沿いに縦断した。参加者は台湾から5名、日本からは3名であった。その中には、



上、淡水(マカイ博士の伝道地)にて、銅像はマカイ博士
下、台南・東寧教会での主日礼拝で

共に祈り、支えよう！

Let us pray for and support people and the Church together!

「東日本大震災救援募金のお願い」

教会の再建・補修、地域の復興・支援に向けての具体的な取り組みを日本基督教団として支援していくため、祈りと共に「東日本大震災救援募金」にご協力をお願いしますよう、お願い申し上げます。

2014年9月

教団救援対策本部長 石橋秀雄
目標額 10億円(国内のみ)
期間 2011年7月1日～
2015年3月31日
振替番号 00110-6-639331
加入者名 日本基督教団東日本大震災救援募金

I Love Taiwan Mission

今、この瞬間に大切な神様の子どもたち



上、オリエンテーション、全体会
下、サマーキャンプ、竹塘教会にて

6月26日から7月12日の間、スタッフ50人、ボランティア4人、現地教会の青年32人、海外参加者69人、参加国23、総勢155人という大がかりな台湾基督長老教会(PCT)主催「I Love Taiwan Mission」に日本人として参加する機会を与えられた。

学校があった私は、2日遅れの参加となったが、日本人の参加者が珍しかったらしく着いてすぐにみんなから大歓迎された。3日間のオリエンテーションを兼ねた全体会の後、グループに分けられ台湾各地の19の教会に派遣され、そこで奉仕を行った。

県にある竹塘教会。年齢性もたのちに驚く。青年25人、子ども100人、さまざまなプログラムで子どもたちを楽しませた。海外参加者一人ひとりの賜物が生かされキャンプは大成功に終わった。10日間楽しく過ごした竹塘教会と別れを告げ台南に全参加者が再び集まりそれぞれの教会の報告会をもった。

ここから、私がこのプログラムを通して学んだことを2つに分けて紹介する。(1)青年について

台湾の青年はバワフルだった。サマーキャンプはもちろんだが、青年たちは私たちをも楽しませるためのプログラムをいくつも用意してくれた。この青年たちは幼い頃こうだったキャン

プや教会生活で育っていった青年であることは明らかであった。竹塘教会の牧師はもちろんだが、この子どもたち、青年たちは将来のために大切な存在であるのだから、彼らは神様の子どもであるから「今、この瞬間」に大切な存在なのだと言われた言葉が強く印象に残った。だからこそ彼らは教会に残り続けているのだ。

(2)日本人として台湾のプログラムに参加したこと

台湾の青年はバワフルだった。サマーキャンプはもちろんだが、青年たちは私たちをも楽しませるためのプログラムをいくつも用意してくれた。この青年たちは幼い頃こうだったキャン

本でもしっかりと教育してこの点を学ぶべきだと感じた。日本との深い歴史を知った上でなお日本を愛してくれる台湾。私はそれ以上の愛を返したいと思った。台湾の教会は愛と信仰で溢れていた。台湾人も、台湾に集まってきた外国人も愛に溢れていることを直接感じる事ができた。

公告

第39回 日本基督教団総会開催について



第39回日本基督教団総会を左のとおり開催いたしますので、ここに公告します。

会期 3日間 2014年10月28日(火) 午後1時30分～30日(木) 午後3時
会場 ホテルメトロポリタン 東京都豊島区池袋二丁目6番1号
2014年8月1日 日本基督教団総会議長 石橋秀雄

傍聴希望者は左の要領に従って 手続きをしてください。

1. 傍聴資格

本教団の教師および現任陪餐会員たる信徒に限ります。なお、信徒の方は所属教会牧師の推薦状が必要です。

2. 参加費 5千円(会場費2千円、資料代3千円)

3. 締切 10月20日(月)

4. 申込先 日本基督教団事務局総務部 〒169-0072 東京都新宿区大久保一丁目7番18号
お申し込みいただいた後に必要手続についてのお知らせを郵送します。
なお、当日申込みは認めませんので、予め申し込みください。
◎建議、請願の締切は10月7日(火)になります。

消息

梶原 壽氏(無任所教師)



14年5月6日逝去、81歳。山梨県に生まれる。66年東京神学大学大学院を卒業、同年西片町教会に赴任。名古屋学院大学、中部学院大学に務める。遺族は、息・梶原順さん、中山貴子氏(無任所教師)

日本基督教団事務局職員募集

◎人員 1名
◎職種 事務一般(総幹事室秘書)
◎採用 2015年1月
◎資格 教団信徒 年齢25歳まで
要: 英作文能力(TOEIC800点、もしくはそれと同等のレベル)、PCスキル(Word、Excel)
◎待遇 教団規定による
◎応募締切 履歴書(写真付き)を郵送にて 2014年11月28日(金) 必着
◎試験 書類選考の後 2014年12月5日(金)

日本基督教団事務局総務部(担当: 道家紀一)
〒169-0072 東京都新宿区大久保1-7-18
アサヒニューシティビル4F
Tel03-3202-0541、Fax03-3207-3918、URL.http://uccj.org



教会を愛する会員たちと(前列右より3人目筆者)

約2年のボン集会を経て、1980年より、ボンより約30km北にあるケルンに移転し、「ケルン・ボン日本人キリスト教会(のちに日本語キリスト教会)」と改称し、今日に至っています。その間、この地に遣わされた牧師は現任者である私を含めて11名。そのほとんどが日本基督教団からの派遣宣教師でした。

短期間に交代するという牧師側の環境と、短期間にこの地で暮らすメンバーが目まぐるしく変化する信徒側の環境が交差しながら、私たちの教会は歩んでまいりました。じつくりと「腰を据えて」教会形成に取り組むことが難しい状況の中で、どのようにキリストの体である教会が育てられていくかが常なる課題として与えられています。

そのことを踏まえて考えれば、教会を支える中心となるのは、この地に永住するメンバーということになると思います。私たちの教会の場合、その多くはドイツ人と国際結婚をし、ドイツ人社会の中で生活しながらも、日本語で福音を聴きたいという願いをもった方々です。そして、これらの方々のライフスタイルが、教会

宣教師からの声

アブラハムのごとく

齋藤 篤

(ケルン・ボン日本語キリスト教会牧師)

1977年11月13日、ボン大学神学部学生寮の一室で、私たちの教会は第一回目の礼拝を行いました。創世記12章より取り次がれたアブラハムの旅立ちは、新しい教会のスタートを切るに最もふさわしい御言葉でした。こうして「ボン日本人聖書集会」は産声をあげ

ました。

約2年のボン集会を経て、1980年より、ボンより約30km北にあるケルンに移転し、「ケルン・ボン日本人キリスト教会(のちに日本語キリスト教会)」と改称し、今日に至っています。その間、この地に遣わされた牧師は現任者である私を含めて11名。そのほとんどが日本基督教団からの派遣宣教師でした。

短期間に交代するという牧師側の環境と、短期間にこの地で暮らすメンバーが目まぐるしく変化する信徒側の環境が交差しながら、私たちの教会は歩んでまいりました。じつくりと「腰を据えて」教会形成に取り組むことが難しい状況の中で、どのようにキリストの体である教会が育てられていくかが常なる課題として与えられています。

そのことを踏まえて考えれば、教会を支える中心となるのは、この地に永住するメンバーということになると思います。私たちの教会の場合、その多くはドイツ人と国際結婚をし、ドイツ人社会の中で生活しながらも、日本語で福音を聴きたいという願いをもった方々です。そして、これらの方々のライフスタイルが、教会

生活にも大きく影響します。

ドイツ人の大半にとって、日曜日は家族と共に過ごすための一日です。レジャーを楽しむ、友人たちと語らいの時をもちます。残念ながらその中に、礼拝への出席が含まれることはなかなかありません。たとえ礼拝に出席したとしても、それは朝の短時間の出来事として捉えられているのが現状です。

また、ドイツの場合「教会税」という制度は、教会の支え方にも大きな影響を与えています。歴史的に国家と深い関係にある領邦教会に所属している信徒は、教会の財源が税金として、所得の一部約2%から自動的に徴収されます。つまり、教会財源の確保と維持のために、各個教会に集められた信徒が努力するといった、日本の教会にみられる姿が無ければ、その必要性もありません。

このような教会生活をめぐる、ドイツの常識が土台にある環境の中で、この地にある日本語教会がどのような根拠を持って立ち、教会形成をめざしていくか、そこには大きなチャレンジがともないます。日本基督教団との協力関係によって、約30年に亘って行われたドイツの教会による経済援助も一昨春に終了しました。確実に迫り来る財政的困難の中で、20名足らずの会員が教会を愛する信仰によって生き、教会を支えることにおいて、主にある一致のもとに歩み始めようとしています。

それはあたかも、37年前に最初の礼拝で語られたアブラハムの心境に重なります。故郷を離れて未開の地に歩み出したアブラハムとその家族は、ただ神による祝福の約束だけを信じて旅立ちました。立ちほだかる障壁は大きくとも、それを乗り越える力を与えてくださる方を絶対に信頼しつつ。

第17回 部落解放青年ゼミナール

日本キリスト教団部落解放センター主催「第17回部落解放青年ゼミナール」は「人間(じんかん)に光あれ(怒りから光へ)」というテーマのもと、8月26日、29日広島県広島市・呉市・福山市にて開催された。開催地のみならず全国各地から他教派から、部分参加も含め50名近い参加者となった。

具体的な活動としては、部落解放の基礎を学ぶ入門講座や狭山事件についての発題、また被差別部落内で牛の育成から屠畜・精肉販売までを担ってきた一家のドキュメンタリー「ある精肉店のはなし」上映会、被差別部落を巡りその歩みを伺うフィールドワークなど、4日間の内に様々な課題が詰め込まれた。もちろん、これらをフォローするために毎夜話し合いが持たれ、活発な意見交換がなされた。

参加者は、長く部落解放へ向き合ってきた者から、全くの初心者まで様々であったが、自分自身の持てる言葉で今の思いを表現し、だれも疎外されるような思いをせずにそこに加わっていった。この空気感が青年ゼミの良さの一つと言えるだろう。



の開催は今回が初めてだ。今ゼミの募集文には「これまで長く関西で開かれてきた中で、ある意味そこに安住している状態から一度抜け出し、新しい人々との出会いの中で、寝ている私たちが起こされに行こうではないか」と記してある。これは、全く違う場所に住み課題に向き合っている方々の間(人間・じんかん)から私たちが新たに気づくことがきつとあるだろう、という準備委員会内の意見を文章化したものだ。

実際にゼミを終えて思うには、この願いはおおむね達成されたというところだ。参加者にとっても、スタッフにとっても、現地である西中国教会の人々にとって、この開催は一陣の風、眠りからたたき起こされる体験だった。このゼミを一つの起点として、今心の中に吹いている風を風にすることなく、いよいよ課題に向き合っていくて欲しい。(後藤 慧報)



つね きよ 國吉 常喜與さん

教会は立ち帰る場所



栃木県生まれ、関東教区常置委員、宇都宮上町教会員。

國吉さんは牧師の家庭に生まれ、「教会の子」として宇都宮で、小・中・高時代を過ごした。その後東京の大学に進学し、1967年から学生運動、労働組合運動に加わった。教会生活から離れた、空白の十数年だったという。

この間に、同世代の学生や活動家の死に直面、命を与えてくださった神、育んでくれた教会への応答として教会生活に復帰した。学生時代に知り合った真理子さんと結婚。宇都宮上町教会で式を挙げた。真理子さんも洗礼を受け、それ以来40年、教会員、教会学校奉仕、現在は教会附属の学校法人みふみ学院理事長、みふみ幼稚園園長を務めている。

への計画は粛々と進められていた。1970年11月5日の献堂式の経過後報告には「1949年以来教文館に借家住まいを続けてきたキリスト教諸団体では、借家期限1969年までは自らの会館をもちた

会館の目的、意義

教団が西早稲田の「日本キリスト教会館」に居を構えた時は、1970年秋。折しも、大阪万博にキリスト教館出展問題を契機として教会・神学校・関係学校・施設など教団の全領域にわたり、ついに部分的には暴力問題にまで発展して教団は揉めに揉めていた。前年1969年夏鈴木正久議長の死後4年間で三議長が変わった教団史上最悪の混乱期であった。だから多くの人が「日本キリスト教会館」の献堂の目的とか意義について関心を持けるキリスト教諸教派・諸団体の協力と一致の精神の具体化を願

い、広く諸団体にユキウス・カルセナター建設を呼びかけ(中略)、やがて「日本キリスト教会館建設委員会」が組織されるに至ったのである。それから45年、幾多の災害がこの国を襲った。その度に建築基準法も変わり、実際の建物の耐震性の危険が判明し急遽教団は西早稲田から大久保通りの建物に一時避難し、事務局・出版局・年金局の教団三局で働く約70名の命の安全をはかった。現在、会館問題特別委員会が今後の方向を鋭意検討し、よい結果を出そうとしている。(教団総幹事 長崎哲夫)